



茨城県地域臨床 教育センターだより

2026
Vol.55

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121

令和8年5月発行(第55号)

就任ごあいさつ



特任教授

河原 貴史

専門領域 ■ 泌尿器悪性腫瘍
■ 緩和医療

泌尿器科へ赴任してまいりました河原と申します。

私は大阪で生まれ育ち、関西で医師としてのキャリアをスタートいたしました。医師になるきっかけは中高生の時に祖父母を相次いで進行がんで亡くした経験から何らかの形でがん診療に携わりたいと考えたからです。大学卒業と同時に泌尿器科医師となり初期研修・後期研修は大学病院や総合病院で勤務しがん診療はもちろん、がん以外の尿路結石や排尿障害、尿路性器感染症など泌尿器科一般診療に従事してまいりました。がん診療の専門性を高めたいという希望もあり、東京のがん専門施設にてレジデントして3年間、スタッフとして3年間の計6年間勤務しました。がん専門施設では泌尿器がんに対する集学的治療のみでなく大腸外科や病理診断、緩和ケア研修などがん診療を包括的に経験することができました。

その後、大学院へ進学し大学院卒業後は大学病院でがん診療に従事してまいりました。泌尿器科がんの中でも尿路上皮がん、前立腺がん、精巣がんなどを中心に担当してまいりました。泌尿器科がんの薬物療法は以前からある化学療法、分子標的薬、内分泌療法のみでなく、最近では免疫チェックポイント阻害剤や免疫複合体薬、新規内分泌療法やそれらの併用療法など薬物療法の選択肢が及も増え治療体系も複雑化してきてい

ます。また手術療法も従来の開腹手術や腹腔鏡手術に加えてロボット支援手術の保険適応疾患も増え手術療法も進歩しました。治療の選択肢が増え診療体系が複雑化する中で、さまざまながん患者さんと向き合ってきました。その中で、病状だけでなく、それぞれの持病や生活背景を大切にしながら、その方に合った医療を一緒に考えていくことの大切さを日々感じています。さらに、がん治療と並行して、症状のつらさを和らげる緩和ケアにも多く関わってきました。治療を継続することだけでなく、病状が悪化していく中で症状を緩和しつつ患者さんの生活をどのように支えていくかを患者さんやご家族とともに考えることも重要な役割だと感じています。これからも、安心して相談していただけるような診療を心がけ、患者さんにとって頼りと考えてもらえる存在でありたいと考えています。

笠間市には以前からよく訪問させていただいており、毎年GWに開催される陶炎祭を楽しみにしてまいりました。多くの作家の方々の作品が並び、器を手に取りながら陶器を選んだり、飲食店の出店を回るのが楽しみで、会場全体に広がる活気ある雰囲気がとても印象に残っています。笠間焼に代表される伝統文化や、栗に代表されるような四季折々の旬の作物、また落ち着いた街並みも大きな魅力だと感じています。笠間市やその周辺にもまだ知らない魅力が多くあると思いますので、これから少しずつ知っていけることを楽しみにしています。

これまでの経験を活かしながら、地域の皆さまに安心して治療を受けていただける医療を提供できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

就任のごあいさつ



病院教授

榎本 剛史

専門領域 ■ 消化器外科
■ 直腸がん
■ 炎症性腸疾患手術

令和8年4月1日付で、茨城県立中央病院外科ならびに筑波大学附属病院茨城県地域臨床教育センター病院教授を拝命いたしました榎本剛史です。4月より県立中央病院外科に勤務しております。

私は平成7年に筑波大学を卒業後、筑波大学消化器外科に入局し、深尾立先生、大河内信弘先生、小田竜也先生のご指導のもと、外科医として研鑽を積んでまいりました。これまで県内各地の病院で、消化器疾患に対する外科治療に幅広く携わってまいりました。2012年からは筑波大学に勤務し、現在は主に大腸疾患の外科治療を専門としております。

長年茨城県内で勤務してきたこともあり、県立中央病院では多くの先生方や看護師の皆様にも温かく迎えていただき、大変ありがたく感じております。以前と一緒に働いていた方々とも再会することができ、改めて地域のつながりの大切さを感じています。

私は、肛門近くに発生する直腸がんの手術を専門としております。骨盤内には排便・排尿・性功能に関わる大切な神経が集まっており、がんの根治性を保ちながら、それらの機能をできる限り温存するためには、非常に繊細な手術が求められます。Da Vinciを用いたロボット手術に加え、括約筋間直腸切除術(ISR)やtaTME(経肛門的直腸間膜切除術)などの術式も取り入れながら、根治性と機能温存の両立を目指した治療に取り組んでおります。

また、他臓器浸潤を伴う高度進行大腸がんの患者さんも少なくありません。そのような症例に対しては、日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)での経験を活か

し、放射線腫瘍科や化学療法科など多くの診療科と連携しながら、患者さんにとって最善の治療を提供できるよう努めてまいります。

県立中央病院も筑波大学附属病院と同様に、「茨城の最後の砦」としての役割を担う病院であると感じております。その使命を大切にしながら、地域医療に貢献していきたいと考えております。

もう一つの大切な役割として、大腸がん検診の普及活動があります。

茨城県、特に県央・県北地域では高齢化が進んでおり、今後も消化器がん患者さんの増加が予想されます。また、多くの併存疾患を抱えたフレイルな患者さんに対して手術を行う機会も増えていくと思われま。その中で、患者さんへの負担をできる限り軽減する低侵襲手術の重要性は、ますます高まっています。

一方で、近年強く感じておりますのは、「最も体に負担の少ない治療は、手術を受けずに済むことである」ということです。私の専門である大腸がんは、早期に発見できれば、消化器内科の先生方による内視鏡治療のみで完治が期待できる場合も少なくありません。

そのため、検診受診率の向上や、要精査となった方が適切に精密検査を受けられる体制づくりは非常に重要だと考えております。私は茨城県生活習慣病検診協議会の大腸がん部会にも所属しております。これまで外科医として、手術を受ける患者さんやご家族の悩みや不安に数多く接してまいりました。その経験を活かし、予防や早期発見の大切さについても発信していきたいと考えております。

今後は、県立中央病院外科の一員として、また東大外科の先生方とも力を合わせながら、茨城県のがん診療と若手外科医の育成に少しでも貢献できるよう努めてまいります。

皆様におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

就任のごあいさつ



特任准教授

中馬越 清隆

専門領域 ■ 神経内科
■ 神経眼科
■ 神経免疫

2026年4月1日に筑波大学附属病院茨城県地域臨床教育センター、茨城県立中央病院神経内科に着任しました、中馬越清隆と申します。筑波大学附属病院在職中は公私とも格別のご厚情を賜りましたこと、ここにあらためて厚く御礼申し上げます。

私は筑波大学卒業後、附属病院での研修と県内の龍ヶ崎済生会病院の勤務を経て母校の筑波大学で約20年勤務して参りました。大学院で取り組んだ研究は眼球運動に関する基礎研究でしたが、その後の臨床研究にもつながり、現在も興味の尽きないライフワークを得ることができました。

神経内科疾患は私が医師なりたての頃と大きく変わり、神経難病であっても「治療できる疾患」が増え治療効果や予後が劇的に変わってまいりました。沢山の患者さんとご家族の悲しみを背負い、多くの医師とスタッフ、研究者の献身が実を結んで現在の神経内科診療があるのを実感します。神経難病患者さんは、病状進行に応じ必要となる福祉サービスやケアプランが刻々と変化するため、多くの職種、多くのスタッフが関わり、医療チームで支えられる必要があります。当院は難病診療連携病院に指定されており、専門機関として難病の治療と経過フォローアップに留まらず、県内の神経難病医療を充実させるため、チーム医療のリーダーシップが期待されていると思います。新規の神経難病治療薬導入やかかりつけ医との密な連携や遠隔診療の試みなど、今後取り組むべき課題が目白押しですが、常勤医体制の病院として県央の脳神経内科診療を支えられるよう、周辺医療機関と連携を密にして診療して参ります。

専門の神経眼科学は、大学院研究で発見した哺乳類のニューロン群が、臨床で眼球運動異常の症例研究につながるなど、日常の診察で捉えた眼球運動異常が研究に速結する面白い分野でもあります。これまで筋萎縮性側索硬化症(ALS)、またアルツハイマー病などの認知症、軽度認知症患者さんのバランス障害にスポットを当て進行予防の研究を行って参りましたが、今後当院でも筑波大学附属病院とも連携して継続していく所存です。また、これまでの大学教員経験を活かし、若い先生方やスタッフさんの学会発表や論文執筆や臨床研究などを補助し、資格取得のキャリアアップへ貢献していきたいと考えています。

余談ですが、「なかまこえ」という名字が珍しいため、患者さんに尋ねられることもしばしばです。そのおかげで患者さんと珍名字談義が始まることもあり、コミュニケーションに役立つ名字に感謝しています。趣味は旅行ですが、世界情勢もありしばらく友部中心に探検しようと思っております(写真はロシア旅行のものです…)。

最後になりましたが、大学入学以来人生の半分以上を過ごし、お世話になっている茨城県のために働く機会を与えて頂いたことに感謝申し上げます。諸先生方に教えて頂きながら、前任の寺田真先生が立ち上げて下さった脳神経内科診療をさらに発展できるよう頑張りたいと思います。今後ともよろしくご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



就任のごあいさつ



病院准教授

岡崎 舞

専門領域 ■ 乳腺疾患

このたび茨城県立中央病院 乳腺外科に赴任いたしました岡崎舞と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は旧桜村(現つくば市)に生まれ、小学校から大学までをつくば市内で過ごしてまいりました。2009年に筑波大学医学専門学群を卒業し、筑波大学附属病院にて初期研修・後期研修を修了し、卒後18年目となりました。このたび、自分の生まれ育った茨城県のがん診療連携拠点病院である当院で診療に従事させていただくことを、大変光栄に存じております。

大学院では若年女性の乳癌を研究テーマとし、若年乳癌患者における妊孕(にんよう)性温存に関する多施設共同研究や、茨城県における乳癌検診データを用いた若年女性に対する検診の意義について研究してまいりました。その後、臨床に復帰してからは、乳癌患者さんのサバイバーシップやサポートイブケアを重視しながら診療に取り組んでおります。

現在は、抗がん剤治療に伴う末梢神経障害の予防を目的とした圧迫療法法の臨床研究にも取り組んでおり、治療成績の向上のみならず、患者さんの生活の質を守る医療の実現を目指しています。臨床で得た課題を研究へ、研究成果を診療へ還元するという循環を大切にしながら、次世代の医療者育成にも貢献していきたいと考えております。

乳がんは女性におけるがん罹患数の第1位であり、生涯で9人に1人が罹患するといわれています。また、他の多くのがんとは異なり、30歳代から増加し、

40歳代後半および60歳代にピークを迎えるという特徴があります。このように、乳がん患者さんはさまざまな社会背景やライフステージにあります。そのため、単に治療方針を決定するだけでなく、患者さんの価値観や生活背景、治療後の人生も見据えながら、共同意思決定(shared decision making)の考え方を大切にし、ともに治療を選択していくことを心がけております。日々の診療においては、患者さんがそれぞれ異なる背景や価値観をお持ちであることを実感しております。例えば、仕事や子育てとの両立を考えながら治療を選択される方や、将来の妊娠・出産について悩まれる若い世代の方など、同じ疾患であっても直面する課題はさまざまです。そのような中で、医療者として一方的に方針を提示するのではなく、患者さんの思いに耳を傾けながら、ともに最適な選択を考えていくことの重要性を日々感じております。

このような乳がん患者さんを支えていくためには、乳腺外科医のみならず、他診療科、看護師、薬剤師、リハビリスタッフなど多職種による包括的な支援が不可欠であり、その重要性はますます高まっています。当院に赴任してからは、多職種の皆様が日々の診療を支えてくださっていることを大変心強く感じております。限られた人員の中でも、それぞれの専門性を活かしながら協力し合うことでより良い医療が提供でき、今後もその連携を大切にしていきたいと考えております。

休日は子どもと過ごす時間を大切にしており、日常の中での貴重なリフレッシュの機会となっています。医療者としてだけでなく、一人の生活者としての視点も忘れず、患者さんに寄り添った医療を実践していきたいと思っております。

着任して間もなく至らぬ点多いかと存じますが、地域の皆様に信頼される乳腺外科診療を築いていけるよう尽力してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。